2020年2月16日

福音書からのメッセージ

しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

（マタイによる福音書5章22節）

イエス様は昔の人の言葉として、「殺すな。人を殺した者は裁きを受ける」という命令を取り上げました。「殺すな」という言葉自体は、モーセがシナイ山で受け取った十戒の中に出てきます。その戒めを聞かされたときに、自分はこれを守れているのだろうかと考える。これが普通の反応なのかと思います。当時の人もそうでした。そして自分をいわゆる「正しさ」の中に入れようと、必死になったことでしょう。

もともと神さまから与えられた戒めは、「殺してはならない」ということだけでした。しかし昔の人は、十戒で与えられた「殺すな」という命令の後に、「人を殺した者は裁きを受ける」という一言を入れます。そのことで、具体的に殺人をすることだけが、神さまから禁じられているものだと限定します。そして自分は大丈夫、正しい者なのだと安心しているのです。

しかしイエス様は、そのような思いに至る人たちに向かって言われます。

兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

腹を立てても、ばかと言っても、愚か者と言っても、裁きを受け、最高法院に引き渡され、火の地獄に投げ込まれる。とても厳しい言葉です。腹を立ててもダメだということは、たとえ言動に移さなかったとしても裁きに値するということです。

この厳しさを、正面から受け止めるのは

とてもしんどいことです。実はこの箇所に、「理由なくして」という一言が付け加えられた写本が複数あります。イエス様の言葉があまりにも厳しいと思ったのでしょうか。「理由なくして兄弟に腹を立てる者はだれでも」とすることによって、自分たちの行動を正当化したのかもしれません。

わたしたちは、腹を立てることが多くあります。怒りと言いかえてもいいかもしれません。そしてわたしたちは言い訳のようにこう思うのです。そんなこと言っても、「怒る」必要があるときもあるはずだ。この「怒り」は相手のことを思っていることなのだ。社会の正義のために「怒って」いるのだと。

しかし、これらの「怒り」の根底にあるもの、それは自分こそ正しく、正義なのだという思いです。自分を正しさの中に置き、周りの人を否定し、非難するのです。けれども、そもそも正しさとは何でしょうか。

あなたたちは「殺すな」という戒めを守っていると思っているかもしれない。しかし自分を正しいものだと思ったときに、人を傷つけ、人を否定し、人を排除しているのではないか。それが「殺す」ことと、何の違いがあるのだろうか。

それがイエス様の伝えられていることではないでしょうか。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/